〔論　説〕

大学生の性格における年代的変化

中　村　　晃

[問題と目的]

社会がめまぐるしく変化し，価値観が多様化していると言われる現代において，若者もまた変化していると指摘されることが多い。大学においても，友人関係の希薄化，授業中の私語や自己中心的な行動の増加，学力の低下，無気力など，現代の若者である大学生について，以前の大学生との比較で否定的に語られることも多い。しかし，太古の昔から大人は若者を否定的に捉える傾向があることが知られている。そのため，年代を追って同じ性格テストで，どのように大学生が変化しているかを知ることは，意義のあることであろう。特に現在，大学が大衆化し，大学において研究機関としての機能よりも教育機関としての機能が期待されてきているが（牧野・森，2002），効果的な教育をする上で現代の大学生がどのような性格傾向を持つかを知ることは，重要であると考えられる。そこで，本研究では，以前と比較して大学生の性格が実際にはどのように変化したのかを検討することを目的とする。

1985年の『現代のエスプリ』の「大学生」（No. 213）の特集では，「ダメ論」を超えてというサブタイトルにつけられており，その中で山崎（1985）は，大学生に対する世間の目は厳しくなっており，今の大学生はダメだという評論や研究が支配的であることを指摘している。また，太田（2002）は最近においても，大学生に対する評価は厳しく，大学生の学力低下以上に，大学生のマナーやモラルが2000年頃から著しく低下していることが，文部科学省などが主催する全国学生指導研究集会

で頻繁に議論されるようになってきていることを報告している。

溝上（2002）は，大学生はダメだという風潮が，戦後の大学生論の大きな特徴であると述べている。その中で，1980年代の大学生の特徴をあらわした用語で，「共通１次世代」があり，1979年から実施され始めた共通一次の成績によって，大学ごとの序列化が進み，その結果として大学生に対する評価が，平均的で個性的意欲が乏しくなった，ということが言われていたことを指摘している。またこの時期は「おたく」や「ふれあい恐怖症」といった用語が生まれた時期であり，対人関係の希薄化や自己中心的な志向が注目され，さらに90年代以降にもさまざまな文脈で取り上げられ，現代社会的な病理の代表的現象となっていると述べている。

一方90年代にはバブル経済の崩壊により，80年代と打って変わり就職率が激減し，「就職氷河期」という用語が生まれた時代である。溝上（2002）は，バブル経済の崩壊後の大学生の特徴として，「自己表現の路線における社会参加」を挙げており，1995年には阪神・淡路大震災が起こり，この震災のボランティア活動に従事した中の45%は大学生，短大生，専門学校生であり，73%が10代・20代の若者であったことから，自己中心主義と言われてきた大学生にも，社会に無関心というわけではないことが示されたと述べている。

また，男女によっても大学生に対する印象は異なることが報告されている。一般に，1990年代以降青年期の女子の変化は大きく，女子は活発で積極的になってきているが，一方男子はおとなしくやさしくなっているという印象が記述されることが多い（児玉ら，2002）。実際，女子の大学進学率の上昇や，非行少年に占める女子の割合の急増など（松田・中塚，2002），青年期女子の変化が報告されることも多い。

このように，時代によって大学生を取り巻く環境は大きく変わり，それに伴い社会からの大学生の評価や扱われ方も大きく変化しているが，実際に大学生自身の性格はどのように変化しているのであろうか。

このような大学生の性格の変化を，性格テストを用いて実証的に検討したもので，寺崎（1985）による研究がある。寺崎は1970年から1984年の間の関西学院大学の大学生を対象に，性格テストであるMPIを用いて，性格特性の逐年変化を統計的に分析した。

その結果，男女とも外向性の指標となるE得点が高くなり，社交的になってきていること，神経症的傾向の指標となるN得点が減少し，神経症的でなくなってきていること，虚偽の指標（自分を良く見せようとする）となるL得点では，変化がないことが認められた。これらの結果から，1970年から1984年にかけては，社交的になってきており，空想傾向や抑うつ・孤独感などが減少していることが確認された。また，法学部，文学部，商学部，経済学部，社会学部，理学部の学部間における性格特性の差を検討したところ，外向性に関しては，最も高いのが商学部，次に経済学部であり，神経症傾向では社会学部と文学部が高く，また虚偽得点では，理学部と法学部が高いという結果が示された。これらの分析の結果，商学部や経済学部では，比較的外向的で神経症的傾向が低いのに対し，文学部の学生は内向的で神経症的傾向が高いという傾向が見られたことを，報告している。

また，菅野と辻による一連の研究（1995，1996）では，1958年から1992年までの35年というより長期にわたり，京都大学の大学生の性格に関しての変化を検討した。京都大学では，「学生生活記録カード」というアンケートを実施しており，その中の性格に関する項目について分析を行った。質問項目は12項目の性格一般に関するものと，25項目からなる不適応傾向に関してチェックするものとの二つに分かれているが，それぞれを分析した結果，性格一般では，消極性，開放性，思考的内向性，理性性の４因子，不適応傾向では，自己同一性不安，情緒不安定性，希死感，被害感，罪業感の５因子が確認された。そこで，それらの因子が35年の間どのように変化しているかを検討したところ，1979年が一つの境目であり，1979年以降では服従的で，依存的，消極的な方向，理性的ではない方向，および自己同一性に関して意識的に悩まなくなる方向に変化していることが示された。また，文学部，教育学部，法学部，経済学部，理学部，医学部，薬学部，工学部，農学部における学部間の性格傾向の差異を検討したところ，経済学部に関しては他学部と比較して開放性が最も高く思考的内向性が低いという結果が示されたことが報告されている。

以上は性格一般についてどのように変化してきたかについて検討しているが，ある一つの側面に焦点を当て，どのような変化があるかを考察した研究もある。

岡林ら（1995）は大学生の人生観がどのように変化してきているかを調査した。「13の生き方質問紙」（Morris）の邦訳版を，1960年代，1980年代，1990年代の大

学生に対して実施し，その傾向の変化を分析した結果，生き方として「慈愛奉仕」「内面生活」「積極行動」「安楽多彩」の４つの因子が見出され，60年代，80年代，90年代と新しくなるにつれて，「安楽多彩」（一つの生き方にこだわらず，状況に応じて柔軟に生き方を変え，平穏な快楽を求める）が増加し，「慈愛奉仕」（他者に奉仕する）が減少する傾向が見出された。これは個人主義と個人固有の人生観や価値観の確立を目指そうというよりも，むしろ急速に変わる社会に流動的に対応するための柔軟な態度を持ち続けようとする傾向が，増大してきているためと考察している。

一方，藤村（2002）は大学生の欲求に焦点を当て，1985年と2001年でどのように欲求が変化しているかをEPPS（Edwards Personal Preference Schedule）の日本語版を用いて検討した。その結果，男女共に人からの指示を受けたい・人から期待されていることをしたいという欲求（追従欲求）が強くなり，友達を大切にしたい（親和欲求），困った時に人に助けを求めたいという欲求（求護欲求）が弱くなっていることを報告している。

以上述べたように，大学生は戦後から現在にかけて，社会から悪い方向に変化していると捉えられることが多いが，一方性格テストを用いた統計調査によると，1980年代までは社交的で神経症的でない方向に変化しているが，1980年代以後は消極的な方向に変化し，人生観や欲求に変化があらわれていることが報告されている。また，若者に対する印象は，男女により異なっていることが示唆されている。

そこで，本研究では，千葉商科大学の学生の性格傾向が1980年代から現在にかけて，実際にはどのように変化したかを，年代を追って性格テストにより検討することを目的とする。また，男女間，および学科間で傾向が異なる可能性が指摘されたため，大学生の性格変化を性別と学科を考慮して検討することを目的とする。

［方法］

調査実施大学と被験者

この調査には，1986年度，1994年度，および2002年度における，千葉商科大学商経学部１年生の，計3828人の資料が用いられた（Table１）。1986年度入学者は，平

Table 1　各年代別人数

年度	性別	商学科	経済学科	経営学科	合計人数（%）	入学者数（受検率%）
1986年度入学者	(男)	429	503	559	1491（ 97.3）	1589（93.8）
	(女)	19	13	10	42（ 2.7）	45（93.3）
	(計)	448	516	569	1533（100.0）	1634（93.8）
1994年度入学者	(男)	415	455	492	1362（ 88.8）	1447（94.1）
	(女)	91	39	41	171（ 11.2）	180（95.0）
	(計)	506	494	533	1533（100.0）	1627（94.2）
2002年度入学者	(男)	207	262	160	629（ 82.5）	1183（53.2）
	(女)	61	22	50	133（ 17.5）	222（59.9）
	(計)	268	284	210	762（100.0）	1405（54.2）
合計	(男)	1051	1220	1211	3482（ 91.0）	4219（82.5）
	(女)	171	74	101	346（ 9.0）	447（77.4）
	(計)	1222	1294	1312	3828（100.0）	4666（82.0）

（人）

均年齢18.47歳（SD＝.69），1994年度入学者は，平均年齢18.46歳（SD＝.71），2002年度は，平均年齢18.35歳（SD＝.91），全体で平均年齢18.44歳（SD＝.76）であった。また，2002年度にはYG性格検査受験者数が他の年度に比較して半数近くに減少しているのは，大学の入学者が減少したこと，およびYG性格検査の受検が必須でなくなったためである。また，分析対象者は，1986年，1994年，2002年の新入生に限定したが，これは大学は４年で１サイクルであること，および80年代，90年代と現在との比較を考慮したためである。

調査内容

性格検査：YG（矢田部・ギルフォード）性格検査の一般用（日本心理テスト研究所株式会社発行）を用いた。YG性格検査は，検査時間が約30分と手軽に実施でき，高い信頼性および妥当性をもつことから，産業界，教育方面や医療方面で最も広く使われている性格検査である（八木，1989）。質問紙は120の質問項目から構成され，12の因子の得点が算出される（Table２）。さらにこの因子の得点パターンから，５つの性格類型に分類されるようになっている（Table３）。

Table 2　YG性格検査の性格因子

因子	因子名	因子の性質	低得点	高得点
D	抑うつ性	陰気，悲観的気分，罪悪感が強い	抑うつ性小	抑うつ性大
C	気分の変化	著しい気分の変化，驚きやすい性格	気分の変化小	気分の変化大
I	劣等感	自信の欠乏，自己過小評価	劣等感小	劣等感大
N	神経質さ	心配性，神経質，ノイローゼ気味	神経質でない	神経質
O	主観性	空想的，過敏性，主観性	客観的	主観的
Co	協調性	不満が多い，人を信用しない性質	協調的	非協調的
Ag	攻撃性	攻撃的，高い社会的活動性	攻撃的でない	攻撃的
G	活動性	活発，身体を動かすことが好き	非活動的	活動的
R	のんきさ	気軽な，のんきな，活発，衝動的	のんきでない	のんき
T	思考的外向性	非熟慮的，反省的しない	思考的内向	思考的外向
A	支配性	指導性，リーダーシップのある性質	服従的	支配性大
S	社会的外向性	社交的，社会的接触を好む傾向	社会的内向	社会的外向

八木（1989）の表を筆者により一部改変

Table 3　YG性格検査による類型

性格類型	特　　徴
A類	平均型であり，目立った偏りがないタイプ
B類	情緒的には不安定になりやすいが，積極性のあるタイプ
C類	情緒的には安定しており，消極的なタイプ
D類	情緒的にも安定し，積極的なタイプ
E類	情緒的に不安定になりやすく，消極的なタイプ

八木（1989）の表を筆者により一部改変

手続き

調査の実施方法は年度によって異なり，1986年度および1994年度では，入学者全員に対しオリエンテーション期間中に性格検査を集団実施した。また，2002年度には一般教育科目の心理学の授業内に性格検査を集団実施した。

［結果］

(1)　各年度ごとのYG性格検査の検討

各年度ごとに，YG性格検査の12の因子における得点の平均値の差の検定を分散分析により行った（Table 4，Figure 1）。その結果，すべての因子の年代による差

Table 4　各年度におけるYG性格検査の因子の得点

因子	1986年度	1994年度	2002年度	F値	多重比較
D	8.63 (5.81)	9.08 (5.79)	10.59 (5.58)	29.58***	'86<'94<'02
C	9.21 (4.81)	9.22 (4.65)	9.79 (4.56)	4.49*	'86, '94<'02
I	8.70 (5.21)	8.81 (5.16)	10.29 (5.25)	26.45***	'86, '94<'02
N	9.34 (5.08)	9.50 (5.08)	10.71 (4.81)	19.97***	'86, '94<'02
O	7.99 (4.31)	8.23 (4.30)	9.78 (4.09)	47.02***	'86, '94<'02
Co	7.53 (3.81)	8.09 (3.91)	8.90 (4.07)	30.63***	'86<'94<'02
Ag	10.59 (3.89)	10.05 (4.03)	9.88 (4.14)	10.17***	'86>'94, '02
G	11.33 (4.27)	10.74 (4.26)	10.54 (4.67)	10.49***	'86>'94, '02
R	12.07 (4.17)	11.35 (4.34)	11.70 (4.38)	10.01***	'86>'94
T	10.15 (4.43)	9.72 (4.31)	8.78 (4.30)	24.81***	'86>'94>'02
A	10.30 (4.57)	9.83 (4.59)	9.70 (4.65)	5.60**	'86>'94, '02
S	13.15 (4.83)	12.32 (5.11)	11.12 (5.27)	40.73***	'86>'94>'02

*p<.05　**p<.01　***p<.001，カッコ内は標準偏差

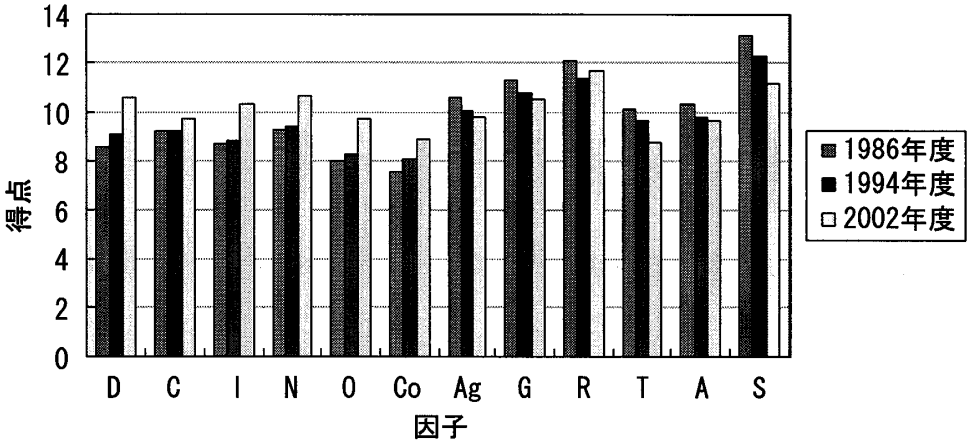

Figure 1　各年度におけるYG性格検査の因子の得点

が有意であり，LSD法による多重比較をしたところ，大きく分けて2つの傾向が認められ，得点が増加している因子群（D，C，I，N，O，Co）と得点が減少している因子群（Ag，G，T，A，S）が認められた。

特に，D，C，I，N因子は情緒不安定性における集合因子とされており（八木，1989），これらの因子が高くなってきていることから，情緒が不安定になりやすい方向に大学生の性格が変化してきていることが示唆された。また，AgとG因子は活動性の集合因子とされており（八木，1989）これらの因子の得点が低くなってきていることから，活動性や積極性が低くなっていく傾向が見られた。また，AとS

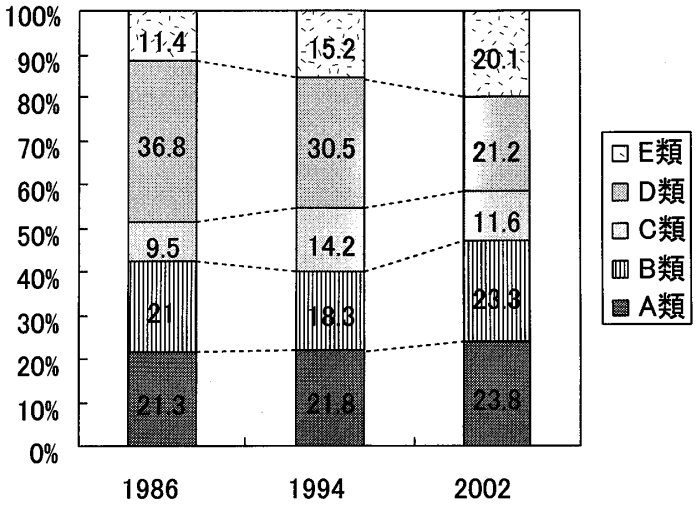

Figure 2　各年度におけるYG性格類型の割合

因子は主導性の集合因子とされており（八木，1989）これらの得点が低くなってきていることから，リーダーシップをとる能力や社交性が低くなってきていることが示唆された。

また，特に大きな変化が認められるのは，O，Co，Sなどの因子であることから，主観的で自己中心的になりやすく，非協調的で対人不信感も強く，対人関係でも内向的になりやすい方向に変化していることが示された。

YG性格検査では12の因子の得点パターンから，最終的に大きくA類，B類，C類，D類，E類の５つの性格類型に分類するが，各年度別に性格類型の出現割合をχ^2検定を用い検討した（Figure２）。その結果，性格類型の割合において年度によって有意な差が認められ（$\chi^2(8)=87.32$，$p<.001$），残差分析の結果，D類では1984年に有意に多いが2002年に少なく，またE類に関しては1984年に有意に少ないが2002年に多いことが示された（いずれも$p<.01$）。1986年ではD類が最も多いタイプで全体の４割弱を占め，E類はD類の３分の１以下であったのに対し，1994年ではD類の減少とE類の増加が見られ，2002年ではD類は全体の２割近くまで減少したのに対し，E類はD類とほぼ同じ割合まで増加するという結果が得られた。これらの結果から，学生全体の傾向として，情緒安定積極タイプであるD類が減少し，情緒不安定消極タイプであるE類が増加する傾向が認められた。

(2) 男女別の検討

YG性格検査の因子の平均点は，性によって異なることが知られているため（八木，2000）各年度ごとに性格の変化に関して，男女を分けて各因子の平均得点の差の検定を分散分析により行った。その結果，全被験者において男性の占める割合が高いため，男性では全体での分析とほぼ同じ傾向が見られ，年度が新しくなるにつれて，情緒面で不安定になる傾向，および行動面で消極的に変化する傾向が認められた（Table 5，Figure 3）。

女性では男性と比較してサンプル数が少ないため，有意性が出にくくなる傾向があるが，男性とほぼ同様に，情緒面で不安定になりやすく，行動面でも消極的になりやすい方向に変化する傾向が見られた（Table 6，Figure 4）。特に情緒面では，1986年度がそれ以後と比較して大きく異なる傾向が見られた。

YG性格検査の性格類型を男女別に年度ごとにχ^2検定により検討したところ（Figure 5），男性では性格類型の出現割合に有意な差が認められ（$\chi^2(8)=80.09$，$p<.001$），残差分析の結果，D類では1984年度に有意に多いが2002年度に少なく，またE類に関しては1984年度に有意に少ないが2002年度に多いことが示された（いずれも$p<.01$）。女性においても出現割合に有意差が見られ（$\chi^2(8)=19.19$，$p<.05$），D類では1984年度に有意に多いが，E類では1984年度に少なく，

Table 5　各年別のYG性格検査の特性得点（男性）

因子	1986年度	1994年度	2002年度	F値	多重比較
D	8.64 (5.80)	8.87 (5.78)	10.37 (5.57)	20.66***	'86，'94<'02
C	9.23 (4.79)	9.09 (4.65)	9.67 (4.48)	3.25*	'94<'02
I	8.71 (5.23)	8.70 (5.14)	10.07 (5.20)	17.62***	'86，'94<'02
N	9.40 (5.06)	9.44 (5.08)	10.68 (4.84)	15.95***	'86，'94<'02
O	8.02 (4.31)	8.07 (4.31)	9.68 (4.12)	37.33***	'86，'94<'02
Co	7.58 (3.81)	8.17 (3.91)	9.02 (4.10)	30.05***	'86<'94<'02
Ag	10.59 (3.88)	10.03 (4.04)	9.96 (4.16)	8.73***	'86>'94，'02
G	11.32 (4.27)	10.66 (4.28)	10.56 (4.64)	10.24***	'86>'94，'02
R	12.06 (4.18)	11.29 (4.33)	11.73 (4.49)	10.43***	'86，'02<'94
T	10.09 (4.36)	9.74 (4.33)	8.85 (4.42)	17.65***	'86>'94>'02
A	10.26 (4.57)	9.72 (4.59)	9.62 (4.69)	6.35**	'86>'94，'02
S	13.11 (4.84)	12.15 (5.13)	10.90 (5.28)	42.73***	'86>'94>'02

*p<.05　**p<.01　***p<.001，カッコ内は標準偏差

Table 6　各年別のYG性格検査の特性得点（女性）

因子	1986年度	1994年度	2002年度	F値	多重比較
D	8.12 (5.90)	10.76 (5.56)	11.61 (5.52)	6.22**	'86＜'94, '02
C	8.40 (5.61)	10.29 (4.51)	10.35 (4.87)	2.92	
I	8.29 (4.62)	9.63 (5.28)	11.30 (5.37)	6.63**	'86, '94＜'02
N	7.40 (5.29)	10.07 (5.02)	10.84 (4.71)	7.75**	'86＜'94, '02
O	7.05 (4.02)	9.58 (4.04)	10.23 (3.97)	10.07***	'86＜'94, '02
Co	6.05 (3.49)	7.41 (3.85)	8.33 (3.89)	6.07**	'86＜'94＜'02
Ag	10.52 (4.30)	10.18 (4.01)	9.53 (3.99)	1.41	
G	11.69 (4.26)	11.34 (4.08)	10.43 (4.86)	2.07	
R	12.48 (4.03)	11.81 (4.35)	11.56 (3.84)	.79	
T	12.19 (6.03)	9.59 (4.18)	8.45 (3.70)	12.32***	'86＞'94＞'02
A	11.52 (4.52)	10.72 (4.53)	10.05 (4.47)	1.90	
S	14.55 (4.30)	13.65 (4.71)	12.17 (5.08)	5.41**	'86, '94＞'02

*p＜.05　**p＜.01　***p＜.001，カッコ内は標準偏差

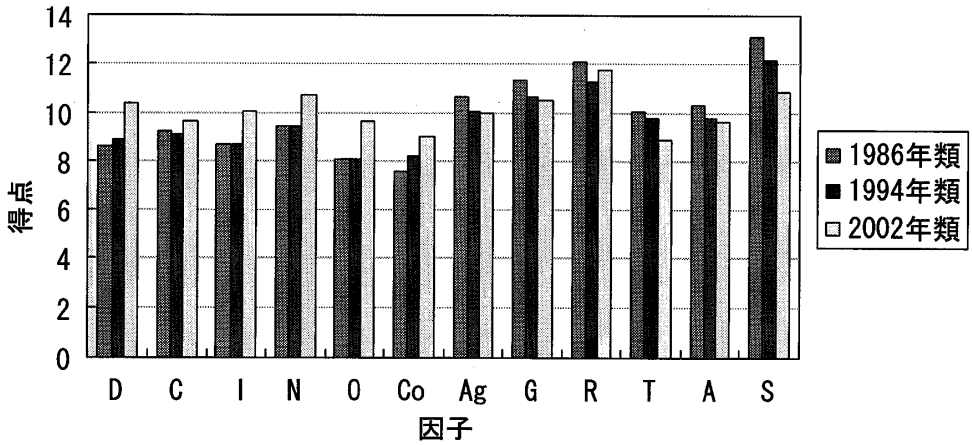

Figure 3　YG性格検査の因子における得点の年度別比較（男子）

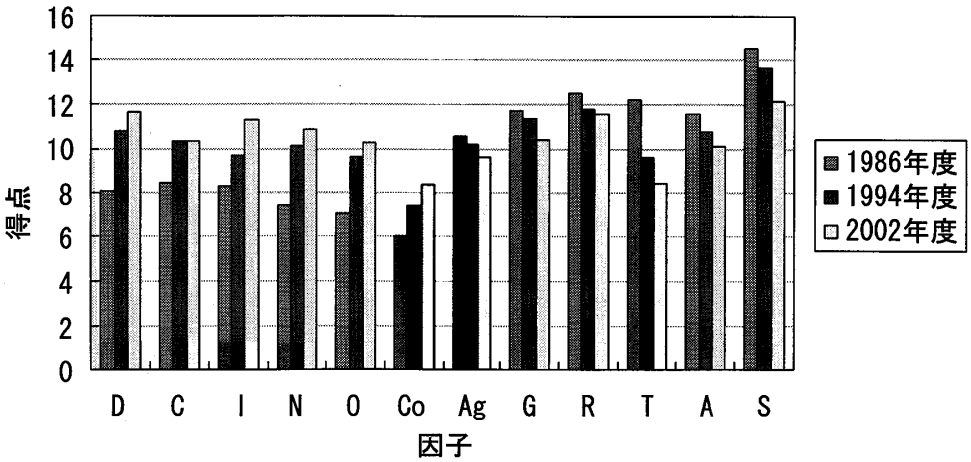

Figure 4　YG性格検査の因子における得点の年度別比較（女子）

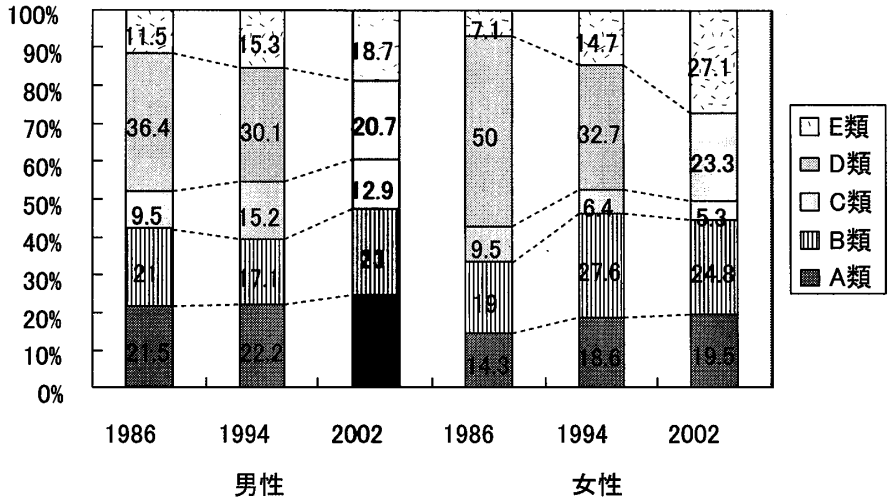

Figure 5　男女別YG性格類型の出現率

2002年度に多いことが示された（いずれもp<.05）。

以上の結果に見られたように，男女に共通して，因子では情緒不安定の集合因子の得点が上昇し，活動性の得点が減少する傾向が見られ，また性格類型の分析においてはD類が減少しE類が増加するという傾向が見られ，男女とも変化の仕方に大きな違いは見られなかった。

なお，各年度における男女の性格因子の平均得点の差に関しては，男女のサンプル数の差が大きいこと（86年度では，全被験者の３％以下），およびYG性格テストの標準化において，男女の平均得点の差が有意であること（八木，2000）を考慮して，今回は検討しなかった。

(3)　各学科ごとのYG性格検査の検討

各年度で，学科別の性格傾向の差を分散分析を用いて検討した。なお，男女で傾向が異なる可能性もあるが，女性のサンプル数が少ないこと，および年度ごとの性格的傾向の変化が男女で大きな差が認められないことから，男女を合わせて分析を行った。

その結果，1986年度では，経営学科において，活動性を表す因子群（G，R因子）が高く（いずれもp<.05），社交性を表すS因子が高い傾向が見られた（p<.05）。1994年度では，経営学科において，情緒不安定の集合因子群（D，C，I，N，O，Co因子）の得点が他学科に比較して有意に低く（いずれもp<.05），社交性を表す

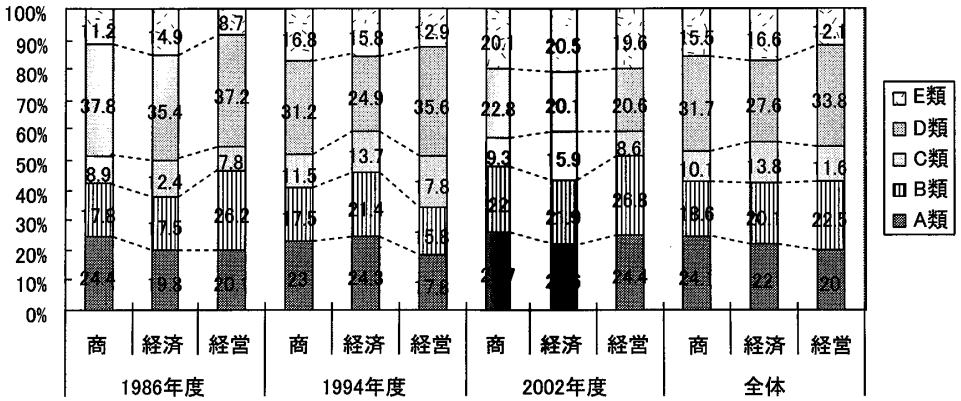

Figure 6　学科別YG性格類型の出現率

S因子に関しては経営学科で有意に高かった（p<.05)。しかし，2002年度では，12の性格因子で学科間で有意差のあった因子は一つもなかった。3年度分をあわせて検討した結果，リーダシップ能力を表すA因子では経済学科が低く，社交性をあらわすS因子では，経営学科が他学科に比較して有意に高かった（いずれもp<.05)。以上の結果から，80年代，90年代では経営学科の学生は情緒が安定していて社交的な傾向が見られたが，2000年代では学科間で有意な差が見られないことが示された。

次に，学科別の性格類型の出現頻度の差を，年度別にχ^2検定により検討した（Figure 6）。その結果，1984年度では，学科間にYG性格類型の出現割合に有意な差が認められた（$\chi^2(8)=29.15$，p<.001)。残差分析の結果，経営学科にB類が多く，経済学科にE類が多い傾向が見られた（いずれもp<.01)。1994年度でも同様に学科間に有意な差が見られ（$\chi^2(8)=27.27$，p<.01)，経済学科にD類が少なく，経営学科はC類とD類が多いことが認められた（いずれもp<.01)。一方，2002年度では，学科間に有意な差が認められなかった（$\chi^2(8)=10.45$，n. s.)。

3年度分をまとめて分析すると，学科間に有意な差が見られ（$\chi^2(8)=32.75$，p<.001)，残差分析の結果，経済学科にD類が少なく，経営学科にE類が少ない傾向が認められた（いずれもp<.01)。

［考察］

以上の結果から，千葉商科大学の学生の平均像は変化しており，全体的に情緒の不安定生が高くなり，行動力が弱くなる方向に変化してきていることが示唆された。特に主観的で自己中心的なものの捉えかた，非協調的で対人不信感の強さが増大し，対人関係における社交性や積極性が減少する傾向が顕著に見られた。これらの現象は，社会で広くいわれている「若者論」と一致する結果となった。対人関係の希薄化に関しての指摘は1980年代から盛んになったが（溝上，2002），その傾向は現代までさらに強くなり続けていることが示唆された。

1986年には最も多かったD類（情緒が安定していて積極的）が減少し，それにともないE類がD類とほぼ同率まで増加するという変化が見られ，学生が消極的で繊細で不安定な性格に変化してきていることがうかがえる。小此木は著書「シゾイド人間」（1980）で，一見相手に合わせているようで，社交的に見えるが，自分が傷つくことを恐れて，人と人との深いかかわりを避けるというスタイルが現代人に増えて来ていることを指摘している。対人関係の消極性と傷つきやすい傾向が1980年代以後増えていることは，小此木のいう「シゾイド」タイプが増えていることが考えられる。

同様に，岡田（1995）は，現代青年の友人関係として，友人から嫌われないように気を遣い，互いに傷つくことを恐れ，自分を出せずに気疲れしている傾向を指摘している。岡田のいう現代青年の友人関係は，今回のS因子の減少，およびCo因子の増加と関係すると考えられる。対人関係における不信感を測定するCo因子が増加し，社交性を測定するS因子が減少することから，他者から自分は本当は嫌われているのではないかと心配し，そのため積極的に対人関係を持つことを恐れるのであろう。実際，大学生の場合自己評価を規定する要因として，対人関係が大きな位置を占め，対人関係のとり方が未熟なため，それについて悩み，そのため情緒不安定になりやすい者が多い傾向が示されている（溝上，2001）。今回の結果では，岡田（1995）の指摘と一致する変化が1980年代から現代にかけて強くなってきていることが確認された。

また，町沢（1998）は，現代の若者の特徴として，自己中心性を取り上げ，自分が傷つけられるのを恐れて，人と深く関わることを避けたり，自分の衝動をコントロールできない，相手への共感性が足りない，などの特徴が見られるとしている。このような傾向がYG性格因子において主観性や自己中心性の指標となるO因子の得点の増加や，社交性を表すS因子の得点の減少と関連しているのであろう。

このように対人関係や行動面の積極性が減少し，主観性や自己中心性が増した背景として，社会の変化，高度に発達した科学技術などが挙げられる。都市化に伴う近所付き合いの減少，遊び場所の減少，少子化や核家族化が，円滑な対人関係を作るうえでの社会的スキルを学ぶ機会を減少させていることは，多く指摘されていることである。また，小此木（1982，1994）は，高度に発達し日常に普及した電気機器の影響により，何でも操作できるような万能感を持つことが自己愛的な社会になることの大きな要因の一つになっていると述べている。また，このような科学技術の進歩により，目に見える形でさまざまなファンタジーが提供されることによって，仮想現実の中で遊ぶことが可能になり，そのため主観的なものの見方が優勢になってきていることが考えられる。このような傾向は，現在まで強くなり続け，さらなる科学技術の発展，少子化により今後もこのような傾向が強くなっていく可能性がある。あるいは，別の社会的要因として，バブル経済がはじけて就職難が続いたことにより，将来に対して希望が持てなくなり，そのため情緒不安定になりやすく，積極的行動ができなくなってきている可能性も考えられる。

岡林（1995）らは60年代，80年代，90年代と新しくなるにつれて他者に対して奉仕する生き方が減少する傾向が見出されたことを報告しているが，これは本研究におけるCo因子の得点の増加と関係しているであろう。Co因子の得点は高くなるほど非協調的で警戒心が強くなる傾向を示すが，他者に奉仕するよりむしろ，自分を守るのにエネルギーを使うのかもしれない。溝上は1995年に阪神大震災があり多くの大学生のボランティアが活躍し，潜在的に他者奉仕の気持ちがあったのではないかと述べているが，危機的状況でないとそのような気持ちが顕在化しない可能性が考えられる。実際，藤村（2002）の研究でも，困った時に人を助けたいという欲求（求護欲求）が弱くなっていることを報告している。そのため，質問紙で測定しているような危機的でない日常的な状況では，奉仕をしたいという欲求はあっても，

なかなか意識化されないのかもしれない。

男女差に関しては，特に大きな違いは見られなかった。一般に，1990年代以降女子は活発で積極的に，一方男子はおとなしくやさしくなっているという印象が記述されることが多いが（児玉ら，2002），今回の調査では，男女とも情緒不安定で，消極的な方向に変化をしていることが認められた。このことは，寺崎（1985）が1970年代から1980年代にかけて，男女とも共通した方向へ性格傾向の変化が見られたという報告，および岡林ら（1995）が1960年代，1980年代，1990年代の人生観の変化が男女ともほぼ同じ傾向が見られるという報告と一致する結果であった。

しかし，D因子やN因子などの情緒不安定性を示す因子が男性の場合，2002年がそれ以外の年に比較して特に高いが，女性の場合1986年がそれ以後と比較して特に低い傾向が見られた。特にD，C，O因子の得点に関しては，一般的に女子の方が男子に比較して高い傾向が見られるが（八木，2000），1986年度においては，これらの因子で，男子よりも女子が低い傾向が見られ，この年度の女子学生の情緒安定性の高さを示唆するものであった。これは，1986年頃は女子が千葉商科大学に入学する数が少なかったことから（1986年度では全入学者の2.8%），自分一人でもこの大学に入学したいという決意が強いため，情緒的に安定し，行動面で積極的な女子学生が入学を希望する傾向が見られたのかもしれない。

本調査では，1986，1994年は新入生全員に対し実施しているが，2002年度は心理学の授業を受け，心理テストを受けた人のみの結果であり，そのため心理学を受講した学生に特有の性格的因子の偏りがある可能性は否定できない。しかし，この調査を行った講義は商科大学の一般教育科目の心理学であり，心理学を専攻希望の学生は含まれず，また受検率も１年生全体の50%を超えているため，そのような偏りは少ないと考えられる。

また，調査対象が関東の限られた地域の商科大学であり，ここで得られた結果をすぐに大学生一般に適用するのは危険であるかもしれない。しかし総合大学でありまた関西にある京都大学の学生の35年間にわたる調査においても，1980年以降，学生が消極的で理性的でない方向に変化していると報告している。このことは，本研究において，GやAg，S因子などの積極性をあらわす因子の得点が減少しており，CやO因子など不安定で主観的な特性を表す因子の得点が増加していることと一致

する結果となっており，大学生全体の傾向と言えるのではないだろうか。

今回の調査では，3年度分の学生全体の学科間における性格的な差は認められたが，年度ごとの学科間に一貫した性格的な傾向は認められなかった。これは，商学科，経済学科，経営学科はいずれも商経学部という単一の学部の中の学科であり，学ぶ授業に大きな差がないためかもしれない。事実関西学院大学での調査では，商学部や経済学部と文学部との間には有意な性格傾向の違いが見られるが，商学部と経済学部の間での学生の性格傾向の違いは他学部との比較と比べて少ないことを報告している（寺崎，1985）。

総合大学である京都大学では，学部間における性格傾向の違いが見られており（菅野・辻，1996），特に今回調査対象となった千葉商科大学の商経学部と内容的に近い学部として京都大学の経済学部では，開放性が高く思考的内向性が低いことが報告されている。YG性格検査において開放性に関連が深い因子としてCo因子が，思考的内向性に関連が深い因子としてT因子があげられるが，今回の調査ではCo因子は減少しT因子は増加する傾向が見られたことから，開放性が低くなり思考的内向性が高くなる傾向が見られた。また関西学院大学では商学部や経済学部は外向性が高いことが確認されているが，YG性格検査の因子で最も関係が深いと考えられる因子であるS因子も減少する傾向が確認されている。

したがって，千葉商科大学の商経学部の学生は，商学科，経済学科，経営学科から構成されることを考慮すると，他学部の大学生の平均と比較して開放性が高く思考的内向性が低く外向性が高いことが予想される。しかし，今回の結果から，これらの特徴も年々弱まる傾向が確認された。

また，特に2002年度には学科間の有意な性格的な差は認められなかったが，これはコース性の導入により他学科の内容でも副専攻で履修可能になったこととも関係しているのかもしれない。

ここで注意を要するのは，どの因子が高ければ良くてどの因子が低ければ良い，などの価値判断は安易にはできないことである。また性格類型においてもどのタイプが良くて，どのタイプが悪いというものはない（八木，1989）。どのような因子にも高ければ長所と短所があり，低くてもそれなりの長所と短所があることが示されている（八木，1989）。今回特に変化の大きかったO，Co，S因子に関しても，例

えばO因子の得点が高くなることによって，主観性や自己中心性が増す傾向があるが，逆にいうと信念が強く想像力が豊かであることも考えられる。実際，福島（1992）は，1979年から1989年の同一地域の同一の年代の中学生に対し，どのような性格的変化がおこっているかを調査した結果，おとなしく消極的・受動的になってきているが，想像力が豊かになってきていることを報告している。このような変化は，本研究の結果と一致するものといえる。Co因子が高いことも，対人不信感が強く閉鎖的な人間関係になりやすい面もあるが，現代を生きる上で，安易に人を信用せず適度な警戒心を持つのも，適応的であるかもしれない。S因子が高いことも，現代では外向的な態度が得をしやすい傾向があるが，内向の人には奥の深さを秘めている可能性もある。実際，中園と野島（2003）は，友人関係に対して関心が低く友人関係を結べないことは不適応の要因の一つになるとも考えられているが，友人関係の中で相手に期待せず相手と距離を置くことで自分の安定や領域を保とうとするなど，友人関係に対して関心を持たないことは現代社会の状況に対する一種の対処であると述べている。性格類型においてもE型が情緒不安定で消極的というと，あまり良くないイメージで見られることもあるが，E型の人でも優秀な人は多く，またこつこつと物事を進めていくのに向いている傾向があり（八木，1987），情緒不安定といっても，細かいことによく気がついたり物事を深く考える傾向があることも考えられる。そのため，どの因子にも良い面と悪い面があり，また性格類型に関してもどの性格類型が良いとは単純に言えず，性格的な違いを言っているに過ぎないことに注意しなければならない。

また，性格因子の得点や性格類型は固定的なものではなく，環境や様々な経験によって変化していく可能性があること（八木，1989）を考慮しなければならない。特に，青年期は成人集団と子ども集団の中間に位置し，自我同一性を達成していくうえで情緒が不安定になりやすい傾向があるため（Erikson，1959），大学生時代の性格類型がそのまま将来的にも続くわけではない。情緒不安定になる原因として不安感が挙げられるが，人間の生き方・パーソナリティなどの人格発達の観点から，不安のポジティブな側面を強調したり，青年期の臨床心理の立場から，青年期の不安が青年を創造的活動や人格的成長へと導く原動力になりうることを指摘されることもあり（山本，1997），必ずしも情緒的に不安になることがマイナス面とは限ら

ない。

以上の点から，大学生の性格傾向は変化してきており，感情的な繊細さ，行動面における積極性のなさ，対人関係における消極性が増したことなどが，主な特徴として挙げられる。しかしこのような変化は，必ずしも否定的なものとは捉えられない。今後の教育を考える上で，教師はこのような性格傾向の変化を考慮に入れた生徒への対応を考えていく必要があるだろう。

［謝辞］

長年にわたり心理学の授業で性格検査を実施しており，また学生相談室を担当しておりました西昭夫千葉商科大学名誉教授に，心から感謝を申し上げます。また，今回の膨大なデータ入力をしていただきました，学生相談室の増田裕子さんに心よりお礼を申し上げます。

参考文献

Erikson, E. H.　1959　Identity and the Life Cycle International Universities Press, Inc.

藤村邦博　2002　大学生の欲求はどのように変わったか　大阪人間科学大学紀要　1，87-89.

福島章　1992　青年期の心―精神医学からみた若者　講談社

児玉真樹子・杉本明子・松田文子　2002　現代の男女大学生の性格特性と性役割認知　広島大学心理学研究　2，73-84.

町沢静夫　1998　現代人の心にひそむ「自己中心性」の病理　双葉社

牧野幸志・森裕紀子　2002　大学生活への満足度に関する教育心理学的研究――学生は大学に満足しているのか？　高松大学紀要，37，59～72.

松田文子・中塚勝俊　2002　子どもの反社会的行動　松田文子・高橋超（編著）　生きる力が育つ生徒指導と進路指導　北大路書房

溝上慎一　2002　大学生論　ナカニシヤ出版

溝上慎一　2001　大学生の自己と生き方　ナカニシヤ出版

中園尚武・野島一彦　2003　現代大学生における友人関係への態度に関する研究　―友人関係に対する「無関心」に注目して―　九州大学心理学研究　4，325-334.

岡林秀樹・大井直子・原一雄　1995　大学生の人生観の年代的変遷　心理学研究　66（2），127-133.

岡田勉　1995　現代大学生の友人関係と自己像・友人像に関する考察　教育心理学研究

43, 354-363.
小此木啓吾　1992　自己愛人間　筑摩書房
小此木啓吾　1982　モラトリアム人間を考える：全能の錯覚に生きる現代人　中央公論社
小此木啓吾　1980　シゾイド人間：内なる母子関係をさぐる　朝日出版社
太田匡彦　2002　大学生は小学生なのか　通学路，家庭訪問，授業参観　アエラ　2002年12月23日付　朝日新聞社
菅野信夫・辻斉　1996　京大入学者の性格の35年間の変容（Ⅲ）――一般学生（非来談者）の経年変化―日本心理学会第60回発表論文集　77.
寺崎正治　1985　パーソナリティ・テストを通してみた大学生の性格特性の逐年変化　人文論及　35（1）　144-164.
辻斉・菅野信夫　1995　京大入学者の性格の35年間の変容（Ⅰ）―性格検査とその構造―　日本心理学会第59回発表論文集　63.
辻斉・菅野信夫　1996　京大入学者の性格の35年間の変容（Ⅳ）―学部間の比較―　日本心理学会第60回発表論文集　78.
辻岡美延　2000　心性格検査法　―YG性格検査　応用・研究手引―　日本心理テスト研究所
八木俊夫　1987　YG性格検査　日本心理技術研究所
八木俊夫　1989　YGテスト診断のマニュアル　日本心理技術研究所
山本誠一　1997　第6章　不安，悩み，孤独感　加藤隆勝・高木秀明編　「青年心理学概論」　誠信書房　81-97.
山崎博敏　1985　ダメの解剖　新堀通也編　「大学生　―ダメ論をこえて―　（現代のエスプリNo. 213)」　至文堂　59-62.